

平成23年度 国立大洲青少年交流の家教育事業  
「子どもたちのハートをつかめ！」

コミュニケーションの相互作用をいかした家族療法を学ぶことで、不登校の子どもや保護者への対応の仕方などを、より具体的・実践的に学べる場となりました。また、参加者相互の交流を深めることで、支援体制のネットワークも広がりました。

## 1. 事業実施までの経緯

本事業は日本学校教育相談学会愛媛県支部との共催で、今回15回目を迎えた。実施当初は、学校現場において不登校が大きくクローズアップされ始めた時期であり、当時の交流の家職員と教育相談学会愛媛県支部とのネットワークを活用し、学校現場で悩んでいる教職員と共に教育相談をどう捉えればよいか、子どもたちとどう関わっていけばよいかを考える場としてこの事業をスタートさせた。平成13年度からは、不登校のみならず、社会的問題にもなっているひきこもりがちな青年にまで対象を広げている。今回も教育相談学会からの紹介をもとに講師を選定し、よりよい研修会になるよう、学会担当者や講師と連絡を取り合い、打合せを重ねた。例年、アンケートで要望されている「より学校現場で実践できる内容を」という視点を重視し、不登校対応の現場で生かせるコミュニケーションの相互作用を用いた家族療法を学ぶことをテーマに本事業を企画・実施した。

## 2. ねらい

教育相談にかかわる教職員・施設職員等が、不登校の予防または不登校状態にある児童・生徒・ひきこもりがちな青年及びその保護者の理解と対応の仕方について、教育学的・心理学的見地から研修を行う。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
4. 共 催 日本学校教育相談学会愛媛県支部
5. 後 援 愛媛県教育委員会・大洲市教育委員会
6. 期 日 平成24年1月7日（土）
7. 場 所 国立大洲青少年交流の家
8. 参加人数 教職員、不登校対応施設職員、教員を志す学生・社会人等 84名
9. 講 師 東 豊 氏（神戸松蔭女子学院大学大学院教授・医学博士・臨床心理士）

## 10. 日 程

【1月7日（土）】

13:00 13:30 14:00			17:30 18:30			20:00 20:15	
7 日 (土)	受 開 講 式	講義・演習 東 豊 氏 「コミュニケーションの相互作用を用いて 新たな現実を構成する方法」第1部	夕 食	講義・演習 東 豊 氏 「コミュニケーションの相互作用を用いて 新たな現実を構成する方法」第2部	閉 講 式	解 散	

## 11. 活動内容

### <開講式>

国立大洲青少年交流の家の新山雄次所長と日本教育相談学会愛媛県支部の芳我明彦理事長が挨拶を述べ、15回目を迎える教育相談に関する研修会「子どもたちのハートをつかめ！」が開催された。



### <講義・演習>

神戸松蔭女子学院大学大学院教授であり、臨床心理士でもある東豊氏による講義・演習「コミュニケーションの相互作用を用いた新たな現実を構成する方法」第1部が行われた。講師の自己紹介の後、まずは「相互作用」とは何かという基本的な知識と理解について、軽妙な語り口で講義が進められた。家族間の中で生じる複雑な問題の場合、カウンセラーがその家族に入ってカウンセリングを行うことで「相互作用」が起き、家族自身が新たな考えや関係性に気付き、新たな現実が構成される。そこから、家族に前向きな変化を起こさせることが可能であることを理解することができた。



休憩の後、参加者代表3人によるロールプレイが行われた。両親役、娘役となり、身近な場面を設定し、それぞれの立場の役割を演じた。ロールプレイ後、東氏が、役割演技者の言葉遣いや会話

の流れに視点をあて、それぞれの役の心理状態を解説した。それを踏まえて、もう一度、ロールプレイを観察することで、それぞれの役柄の相互関係や心理状態をより深く理解することができた。

また、東氏が、実際にカウンセリングをした事例をもとに、家族療法のねらい、手法について全員で共通理解を図った。まず、相談相手の話していることがN要素（ネガティブ）な内容か、P要素（ポジティブ）な内容なのかを判断することが大切であり、そこから、ポジティブな内容を多く引き出すことで、前向きな心理状態（P循環）にしていくことが重要であることを確認した。そのための3つの原則は、「Pの言葉に強く反応する」、「その言葉を強めに繰り返して言う」、「物語を変える（どう乗り切ったかななどの工夫やコツを聞き出す）」である。その後、「わたしの小さな悩み」をテーマに、参加者全員が3人1組になり、ロールプレイを行った。インタビューア（聞き手）、クライアント（話し手）、オブザーバー（観察者）の役割を交替で演じた。どのグループも先ほどの講義を参考にして、意欲的に取り組んでいた。

第1部の後半では、参加者代表2名と東氏による家族療法（面接）の実演を行い、その様子を映像に記録した。東氏がセラピスト（治療士）を担当したが、約40分間の時間設定の上、内容の設定は代表者2人が考えるという難しいものであった。その中でも、代表者は、臨機応変に役割を演じ、参加者に貴重な事例を提供した。また、臨床心理士の面接を実際に見られるということで、参加者全員が、真剣にその様子を見守った。



第2部では、第1部の面接の映像を振り返りながら、東氏が解説を加えていった。セラピストのとした態度や質問の意図、話題の振り方や変え方等、理論に裏づけされた解説は、参加者の誰もが納得し、家族療法について、さらに理解を深めることができた。



#### <閉講式>

参加者は、コミュニケーションの相互作用の効果や家族療法を学び、子どもや保護者とのよりよいかかわり方を再確認し、教育相談に自信を深めた様子であった。また、新しい知識を習得し、スキルアップができ、学校現場に生かしていこうという意欲が表情から伝わってきた。国立大洲青少年交流の家の新山雄次所長と日本教育相談学会愛媛県支部の芳我明彦理事長が閉会の挨拶を述べ、県内各地から約80名の参加者を集め、盛大に開催された15年目の国立大洲青少年交流の家教育事業「子どもたちのハートをつかめ！」は幕を閉じた。

## 12. 参加者の声

参加者の事後アンケート結果

※満足：84% ※やや満足：16% ※やや不満：0% ※不満：0%

- 講師の先生の「現場でも生かして欲しい」という願いがよく分かり、熱意が伝わってきた。
- 中央の研修に行かなくても、専門の講師のお話を聞く機会を作っていただき、とてもありがたかった。
- 内容が現実とマッチしていたので、すぐに現場で生かせることができそうだった。
- 単なる不登校の予防・対応といった話はこれまでもいろいろあったが、今回のような内容は、初めてだったので、とてもいい研修の機会となった。
- 講師の先生が、実際のロールプレイを見せてくれたことで、カウンセリングの仕方がよく分かった。
- 講義とその内容の理解を深めるためのロールプレイ、映像での振り返り等のおかげで、よく理解できた。
- 研修時間は、もう少し早めに始めて、早めに終わればよかった。

## 13. 成果と課題

昨年度より、研修プログラムを1日開催とし、著名な講師による講義・演習を行った。例年、県内の各種学校や不登校対応施設に協力していただきながら開催要項とチラシを配布しているが、今年度も84名という幅広い職種・年齢層の参加者を集めて研修会を開催することができた。

毎年アンケートで要望されている「より学校現場で実践できる内容を」という視点を重視して講師を選定し、座学だけでなく、ロールプレイ等の演習の時間もしっかりと確保したことで、より具体的で実践的な研修ができた。「コミュニケーションの相互作用」という家族療法の視点を取り入れた子どもや保護者とのよりよいかかわり方を学ぶことができたことが何よりの成果である。特に、現場で臨床心理士として活躍されている先生のカウンセリングの様子を実際に観察できたことは、参加者にとっても大きな財産となった。また、質疑応答の時間に先生方の抱える問題や悩みを情報交換できたことで、おおずふれあいスクールと他の適応指導教室、参加者相互のネットワークも広げることができた。

アンケートには「講義・演習の内容、講師の先生共にすばらしく、ぜひ継続してほしい」という意見が多い。「より学校現場でいかせる内容」「演習を柱に置いた研修」という要望は継続して取り入れながら、研修会でつながった参加者のネットワークを強化し、不登校への支援体制や校内に持ち帰ってからの研修体制を確立させること、また、新しい参加者層の開拓が今後の課題である。さらに、共催団体である日本学校教育相談学会愛媛県支部との連携を強化することで、研修会の日程、内容等の更なる充実を図っていきたい。